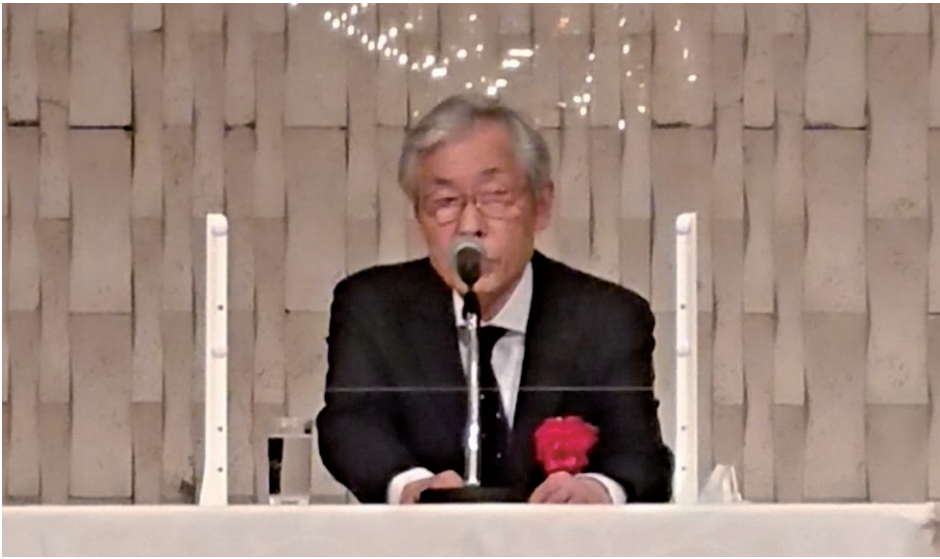




池端 俊策氏

連合駿台会四月特別例会

「大河ドラマで歴史をどう書くか」

脚本家 池端 俊策氏

延期になっていた連合駿台会の例会（三月例会延期分）を、令和三年四月二十八日（水）十七時三十分より、ホテルグランドパレス・ダイヤモンドルームで、池端俊策氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました（挨拶主旨）。

本日は新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言下にもかかわらず、かくも大勢の会員の皆さま方にお集まりいただきましたこと、心から感謝申し上げます。今回の例会開催につきましてはずっと悩み続けていましたが、会員の皆さまの熱くそして強いご要望により開催が実現しましたこと、本当にありがとうございます。



連合駿台会報

No.345 令和3年6月15日発行
 発行・編集 連合駿台会
 発行人 広報委員長・齋藤柳光
 編集人 事務局・矢嶋まゆ子
 〒101-0052 千代田区神田小川町三十二
 明治大学「紫紺館」内
 電話（〇三）三二九六―四七四七
 印刷 有限会社 美創

さて、昨年来、コロナ、コロナで外出もままならず、ずっとご自宅にいらした方も多いのではないのでしょうか。その間減入っていた方も多かったと思いますが、今回、連合駿台会の会員お二人が、大変な栄誉に浴されましたので、ご紹介申し上げます。まず昨年十一月初の叙勲で、田中等さんが弁護士功勞にて旭日中綬章を授章され、翌十二月には、明治大学アカデミーコモン入口にある創立者三名のレリーフ像の制作者であり、また当会のバッジも作成していただきました山田朝彦副会長が、日本芸術院会員に選出されました。彫金部門では日本で九名ということで、大変名誉なこと、心よりお祝い申し上げます。

コロナウイルスに新たな変異種も出てきて、再度大変な猛威を振るっております。今日の東京都の感染者は九百二十五名だそうです。ここにお集まりの皆さまも、本日は命がけで来ていただいたことでしょう。それはひとえに池端先生の講演をお聞きになりたい一念だろうと思いますので、後ほど有意義で興味深いお話を堪能されて帰りいただきたく存じます。本日は厳しい環境の中、ご出席いただき、ありがとうございます。六月二十四日には、令和二年度の総会も予定しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

*

『太平記』の「泥臭さ」に惹かれて

『麒麟がくる』の脚本のためには、まず一年間ほどは勉強のためひたすら本を読み、安土城跡などの現場を見て歩き、その後二年かけて書いたので、結局三年かかった。週に一回・一年間の放映なのに、そんなにかるのか……と思われるかもしれないが、書くほうは一週間に一本とはいかないもので、この三年間は、まるで自分が室町時代にいるような錯覚すら感じたほどだ。

今日はまず「縁」についてお話ししたい。

私にとって脚本という仕事は「縁」があった始めたもので、縁というのは「運命」のようなものかもしれない。明治大学在学中は演劇研究部に入って芝居三昧の毎日だったが、三年生になって近代政治思想史の橋川文三先生のゼミに入ったことをきっかけに、政治や日本近代史に興味を持つようになった。もともと古典に興味があり『平家物語』も読んだが、これはちょっと高級すぎる感じがして、次に『太平記』を繰り返し読むうち、ここで描かれる人間の「泥臭さ」のようなものに惹かれるようになった。

後に脚本家になってNHKの仕事をしていた頃、「大河ドラマを書くのなら、どのあたりを書いてみたいですか?」と聞かれたことがあり、すかさず『太平記』がいいですね」と答えたことがあった。多分、学生時代に体

験したことや読んだものが、体に染み込んでいたのだと思う。ところが『太平記』はダメですね、南北朝の天皇問題が絡んでくるので、難しいですよ」と言われた。現在の天皇は北朝系にもかかわらず、南朝の後醍醐天皇を追いかけて北朝を立てた足利尊氏は、明治から昭和前半にかけては極悪非道の人物のようにいわれ続けてきた。ところが昭和天皇が崩御され元号が変わると、今度はNHKのほうから方針を変えて「太平記をやりませんか?」と言ってきた。

このとき私は、日本文化の奥深さというか、何とも言えない人間関係の取り方のようなものを感じた。日本人は誰かが時代を見ていて、ここが変わり目だということを捉えることを代々学びながら、時代の呼吸を身に着けて生きてきたのだ、と思ったものだ。

こんな経緯で四十五歳の時に『太平記』を書くことになったのだが、その時に読んだ高柳光寿氏の『足利尊氏』（一九五五年刊）では、時代の流れで人物の評価は変わるし、権力が変わるとそれに即して過去の歴史評価も変わるのだが、そういうことに捉われず史料から事実だけを追いかける、史観に捉われず事実だけを見つめる……ということを教えられた。水戸学などに代表される皇国史観において、尊氏は悪党だと捻じ曲げられ、戦前までは逆賊・足利尊氏を論ずることは永らくタ

ブーだったが、戦後になってその禁が解かれると、この大物の評価が見直されることは自然の成り行きで、高柳氏の『足利尊氏』はその代表作ともいえた。

ドラマというのは、視聴者が主人公に感情移入できないと成り立たない。だから大河ドラマの主人公が悪人では、観るほうも書くほうも耐えられないものだが、この本を読んでから尊氏主役でやりたいと思うようになり、NHKにもその意向を伝えた。南北朝時代のヒーロー代表格といえば楠木正成だが、私はあえて足利尊氏を主役にして、真田広之さんに演じてもらうよう頼んだ。

政治家は相対的価値の中で生きているので権力闘争をする。尊氏の場合は、腐敗してきた鎌倉幕府を、うつけ者の執権・北条高時では支えきれないと読んで、討幕を目指した。しかし一つの時代を倒すためには凄まじいパワーが必要で、結果的には多くの人々を戦いに巻き込んで殺さざるを得ない。尊氏も同様で、身内さえも倒さないと時代を変えられないという辛い立場にあるため、書いている私も正直なところしんどくなった。この脚本も三年間かけて書き、その量は原稿用紙六千枚くらいになったが、終了後しばらくすると、頭は動いても身体がついていけなくなり、その後二年間くらいは仕事をしなかった。NHKは脚本家を大事にしてくれる不思議な局で、

役者よりもギャラが高かったので、一年分のギャラで二、三年は何もしないで生活できたことは、ありがたかったと思っています。

『一つの時代の始めと終わり』を書きたい

縁というのは不思議なもので、ある哲学者が「偶然と必然が重なりとそれは運命になる」と言っている。もちろん偶然と必然は異質なもののだが、それが重なる時に運命が生まれるというのだ。私の場合だと、大学時代の愛読書の中に『太平記』があつて、卒業後に脚本家になって思いがけなく『太平記』を書くという「偶然」に行き当たったのだが、大学時代に『太平記』を読んでいたことが、必然になっていくわけだ。

このたび『麒麟がくる』を書いたが、その前段階として『坂の上の雲』というドラマの脚本・監修をやったのだが、近代が舞台だったので、大学でやっていたことが全部役に立った。偶然とは思えない、必然なのだと思う。ずっと自分で面白いと思っていたことを、ある時、これをやるために今までがあつたのかも……と思える瞬間があるが、本当に不思議なことで運命を感じざるを得ない。

その『坂の上の雲』で制作を担当していた人が、三年前の秋にドラマ部長になって、突然「大河ドラマをやりませんか？」と声をかけてきた。私は七十二歳、七十歳以上で大河

ドラマを書いた人は誰もいない。橋田壽賀子さんが『春日局』を書いた時も六十代前半だったと思う。だから「僕はもう爺さんだよ」と笑いながら、「いつの時代をやるの？」と聞くと、「戦国時代末期をやりたい」と言う。戦国時代は視聴率が取れるので、大河ドラマの存亡をかけて起死回生の作品を作りたいとのことだった。戦国時代末期の作品では、平幹次朗さんが主役・齋藤道三を演じた『国盗り物語』（一九七三年）があつたが、だいぶ前のことだから、もう一回やってもいいんじゃないか、緒形拳さん主役の『太閤記』（一九六五年）は、大学時代に見てとても感銘を覚えて、こんな作品をつくってみたいと思ったものだ……、などと話ははずんだ。

そして「僕は足利尊氏を書いた男だよ。時代を壊すということは次の時代をつくるという事で、尊氏は鎌倉幕府を倒して室町幕府を開いたけど、室町時代は今でも日本に伝わる様々な伝統文化を花開かせた素晴らしい時代だったと思うんだ。『太平記』を書き終えた時から、何らかの形で室町の最後をやりたいと思っていた。『一つの時代の始めと終わり』を書きたかったんだよ」という話になった。では最後の將軍は誰かというと、十五代・足利義昭。『麒麟がくる』でも重要な役柄で登場したが、主役としては地味すぎるということになった。戦国時代のスターといえ

ば、何といっても信長・秀吉・家康の三大ヒーローがいる。それ以外の人物を主役にした大河ドラマもあつたが、この三人は圧倒的に知名度が高い。でも彼らを主役にしたドラマをまたやるのも……という思いもあつた。

他にいないかな？ という話をしているうちに、ふと光秀が頭に浮かんだ。信長を殺して秀吉に討たれるという、戦国末期の中核にいた人物なのに、「主君殺し」という悪いイメージがあるせいか、誰もこの人を主役にしようと思わなかったようだ。「光秀はどう？」と言うと「ちょっと印象悪いですね」ということだったが、ではちょっと調べてみる、ということだったのでその日の話は終わった。

誰の本を読めば光秀のことが一番わかるのかと調べてみると、これがなんと高柳光寿氏の『明智光秀』（一九五八年刊）だったという偶然には驚かされた。高柳氏は尊氏と光秀を描いて有名になった人で、今回の大河ドラマで時代考証をお願いした小和田哲男先生は、高校時代にこの本を読まれて歴史学者になられたという。高柳氏の『明智光秀』を読むと尊氏と同じような印象を受けた。歴史は時代によって歪められ、江戸時代に儒教思想（朱子学）が大勢を占めると、主君殺しはとんでもないということで、尊氏同様、光秀も信長殺しを批判されて、それが日本人の心に刻みこまれた。しかし信長を討つにはそれなりの

理由があつたはずで、高柳氏は綿密な史料の中からそれを追いかけて、光秀は善人だったと結論づけている。

僭越な言い方だが、歴史の裏街道を歩かされている人物に興味を持つというところで、私と高柳氏は体質が似ているのではないかと感じた(笑)。今村昌平の下で『復讐するは我にあり』で犯罪者の心理を追いかけてたり、『楢山節考』では親を捨てに行ったりと、人間の暗い部分を描いてきたが、そこに人間の本質が仄見える。人間とは何なのか? という答えは、明るくて幸せなところではなく、暗いところから何かが見えてくるもので、ドラマとは人間の裏側を見せることで、人間の表裏を正確に照らし出している。高柳氏も時代が人物を捻じ曲げた形で伝えるのを見て、史実の中から正確なものを伝えたいという欲求に駆られたのではないだろうか。

ドラマ制作者は歴史の線を描く

明智光秀を書くことに決まると、誰を主役にするかと尋ねられ、私は間髪を入れず長谷川博己さんと言った。これも不思議な縁で、彼とは『夏目漱石の妻』というドラマで初めてご一緒したが、最初は背が高すぎて漱石のイメージとは違うなと思ったのだが、いざ撮影に入るといつも暗い顔をして、漱石の鬱気味や気難しさになりきろうとするような面白

さがあつて、素晴らしい役者だと感じた。

その直後に大河ドラマの話が来たこともまた縁だったのだろうが、光秀は誰にと言われたときに、「漱石でしょう」と言ってしまったくらいだ(笑)。繊細でまっすぐ前を向いていて、悪いことをしない正直そうな顔立ちが私が抱く絶好のキャラクターイメージ。事実はともかく、周りを固める齋藤道三や松永久秀は、あらゆる悪事に手を染めてのし上がってきたドロドロの人間というイメージが強いので、光秀を演じるのは清潔感のある長谷川さんが適役だと思った。ところが長谷川さんは朝の連続テレビ小説『まんぷく』でヒロインの夫役に決まり、正式にオファーはしたものの、スケジュール的に厳しいということで本人も相当悩んだようだ。しかし「大河ドラマの主役なんて一生に一度だぞ」と言つて、懸命に口説き落とした。

先ほどから述べているように、歴史というものには捻じ曲げられて伝えられていることが多い。本能寺の変を描いた本がどれほどあるかわからないほどだが、言い換えれば、これが起きた理由がいまだに解明されていないということだ。それほど難しいことなのか? と思つていろいろな本を読んでもみると、確かに光秀の「気持ち」がわからないのだ。理由としては、光秀は信長に衆人の前で面罵されたり叩かれたりして恨みを持っていた、親し

くしていた四国の長宗我部元親との同盟を信長が反古にした、など諸説あるが、決定的なものが見つからない。しかし理由がよくわからないということは、ドラマになる、謎だから視聴者もドラマに入り込める。

歴史学者は謎を嫌うので、理由を明かそうと史料探しに奔走して、今では高柳氏の本すら古くなってきたほど新しい史料が出てきて、本能寺の変の謎に迫りつつある。しかし決定打はない。歴史学者は史料から「点」を探り出し、点と点を結ぼうとするが、そこを史料だけで埋め尽くそうとするのは不可能だと思う。環境やタイミングによって、人間は自分の心理すら読み解けない場合がある。だから四百、五百年も前の人物が、どういう心理からそのような行動に出たかの理由については、結局のところ、想像するしかないのではないか。

『武功夜話』(ぶこうやわ)戦国時代から安土桃山時代頃の尾張国の土豪前野家の動向を記した覚書)には、柴田勝家が北陸で苦戦している時、信長の命令で秀吉が蜂須賀小六や竹中半兵衛を連れて赴いた時の話がかかれていいる。織田家代々家老の出身である勝家は秀吉の出自を馬鹿にしていたし、秀吉も成り上がり者の己の身分をよくわかっていたが、援軍で行ったとき、後詰(ごづめ)先鋒隊や本軍の後方で、戦闘の応援や交替のために控

えていること)にされたことで勝家と決裂し、戦場から離脱した、と書かれている。当時、勝手に戦場離脱した者は打ち首であるが、秀吉はそれを知りながら、長浜城に帰還して連日酒盛りをしていた。安土城にいる信長から呼びつけられた際にも、信長様に他意はないが、勝家が気に入らないからやっただけで、信長様に対する敵愾心がないことを証明するために酒を飲み、戦う意思がないことを示したと言うのだ。どうやら戦国時代の主従関係はそれほど絶対的なものではなく、主従関係の厳しい江戸時代の君主と家来の関係とはかなり異なっている。歴史学者は『武功夜話』を信憑性に欠ける本として認めてないが、江戸時代の人は本気にして読んでいた。嘘か実かは別として、江戸時代の庶民にとつては、戦国武将はこれくらい感覚で生きていたというリアリティがあったからこそ、この本が人気を博したのだと思う。

歴史学者は信ずるに足りないのと切り捨てるが、ドラマを作る者は、戦国時代を生きている人間がどういう呼吸で生きていたか、主君をどう見ていたか、仲間をどう見ていたかという日々の生活を知りたいし、それがわからないと人間を描けない。ドラマはフィクションだが、あくまでも歴史上あったことをフィクション化している。フィクションと事実との間を、歴史学者は点だけで見ているが、ド

ラマ制作者は線を描こうとしており、これは想像力に頼るしかないのだ。

『本能寺の変からの逆算』はしない

歴史上、光秀が登場するのは四十一歳の時、義昭と信長を引き合わせて上洛させ、室町幕府を再生するための介添え役を務めた。では光秀は四十一歳まで何をしていたか？ いろいろな憶測はあるものの、歴史学者は何も証明できないが、私たちは二十歳から本能寺の変の五十五歳までの光秀像を、自分なりに構築してみる。歴史学者が光秀の足跡を見つけれない理由は、主君殺しの罪が親族に及ぶことを恐れ、明智という姓を変えたぐらいだから、手紙類などもすべて焼き払い、きれいさっぱりなくしてしまった可能性もある。四十一歳からの人生がわかるのは、信長公記など他の人の史料や日記に登場するから、その足跡が見えてくる。つまり本能寺の変後、すべてが抹消されたと考えるしかない。

四十一歳までは、越前で苦労したこと、時々京都に出て幕府の人たちとも付き合っていたこと、細川一族とのとふれ合いなどいろいろ書いてきたが、不思議なのは四十一歳で初めて歴史上に登場し、信長と義昭を繋げて幕府の主要メンバーになるが、そこから近江坂本城主になるまでがわずか四年だったこと、これは凄い。また確かな文献によると、俸禄

は五百貫(約六千万円)というのも驚きだ。いきなり歴史に飛び出してきて、四年間でこれほどの出世を遂げたということは、それまでも相当評価されていたはずで、そこから逆算するとそれまでの光秀の生き方が想像できた。いろいろな角度から光秀を眺めていくと大変興味深かった。

四十一歳で登場して、十五年後の五十五歳で信長を殺すわけだが、これはかなり短い。昔は「切った張った」で結果が出るのが早いとはいうものの、その十五年の中で光秀は何を感じて、信長はダメだと見限ったのだろうか？ 十本くらい書いたところで撮影に入ったが、その時はまだ本能寺の変の原因はつかめなかった。これは長谷川さんにも伝えたが「本能寺の変を起こす人物だと思って演技しないでね、自分は謀反を起こす人間だ」という先入観で演ずると、信長と対面した時に複雑な感じになってしまいうから。まったくの白紙状態で、信長と一緒に生きていって欲しい」と。

「本能寺の変からの逆算」はしないでと言いつつも、私自身でもどうして本能寺の変が起きるのか、いまだに想像つかなかったが、それはそれでいいと思うようになった。人は誰でも明日はわからないのだから、光秀と一緒に歩いていこうと思った。日々会う相手と、その時々で感情で生きていく……、光秀には

こんな人間になりたい、麒麟がくる平和な世の中にしたいという思いはあるけれど、まずは日々戦って目の前の敵に勝とうとした。義昭を奉じて室町幕府を立て直し、武士をまとめて、一つの大きな政権(国)を作ろうと日々奮闘するが、信長を殺すことになるとは当初は思ってもいなかっただろう。ただ戦のない平和な世の中にするために、信長に動いてもらおうとは願っていたと思う。一方、信長は光秀より六歳年下だったから、四十歳まで人生のいろいろな経験を積んだ光秀をそばに置いて、相談役として信用して、大事にしていたのは間違いない。そうでなければずか四年で大名にはしないはずで、一緒に何かをつくろうとしていた。

絶えず二者択一を迫られていた光秀

本能寺の変を決心するのは、全四十四話中、三十五、六話くらいだったと思う。信長は謀反を起こした義昭を追放して天皇側につき、心の内で、幕府は無視して天皇方と直に取引し、義昭を抹殺して自分が武士の棟梁になればいい、という方向に傾いていく。私はもともと室町幕府の最後を書きたいと思ってこの仕事を引き受けたので、義昭に思い入れがあつて、信長のように用済みになった義昭をポイと捨てる気にはなれない。だから義昭自身も、ヒューマニズム溢れる優しい将軍に書

いたつもりだ。信長から義昭を殺せと命令されて、光秀は決心せざるを得なくなったのもあっていったが、これに関しては監修者である小和田先生も異存がなかったようである。

信長は天皇方につくが、光秀は幕府と天皇の間で悩む立場に置かれる。光秀は絶えず二者択一を迫られていた。人間なので誰でも好き嫌いがあつて、「この人についていきたい」という思いもあるが、「この人なら良い世の中をつくってくれるかもしれない」という思いもあり、常に二つのことを考えなければならなかった。齋藤道三と義龍親子のことでも、信長と義昭のことでも、いつもそういう側面に立たされる運命だった。

私はこれを書いていて、今の日本とよく似ていると思った。現代ではアメリカと中国、日本はどちらにつくのか、どちらに正義があるのか? という選択に迫られる。古代日本でも朝鮮半島で対立する新羅と百済に対し、中国の唐は新羅に援軍し、日本は百済について結局負けるが、千年以上前から、日本は大陸をにらみながら、どう生きていけばうまく泳いでいけるかを、絶えず考えていた国なのだと実感している。

ドラマでは、主人公がどういう人物かを描くために「脚本」を書くのであつて、「史実」を書くのではない。本能寺の変があることは皆わかっているのだから、そこへ至るプロセ

スの中で、この人物はいい人でしょうか? この人の行き方や正義感をどう思いますか? 麒麟がくる世の中を望む気持ちが伝わったでしょうか? ということをわかってもらおうのがドラマのテーマなのである。

歴史的事実はみんな知っている。光秀が本能寺を起こし、一緒に新しい国をつくらうとした信長を討つという心の痛みや、新しい国をつくるためには、友人も殺さざるを得ないところまで追い詰められた人物像を描きたかった。尊氏もそうだが、歴史上名を残した人物はみな、それだけ痛みを伴う戦いをしてきたのだと思う。

最終回は、光秀の死後、彼の痛みがどういうふうになるの世に伝わったかを少し見せることで、「あなたのやったことは無駄ではなかったよ」と伝えたかった。馬上の光秀の姿は、駒をはじめとする残された者の希望でもあった。信長がやろうとしたことはそのまま秀吉が踏襲し、秀吉の死後は、家康が最終的に二百六十余年の平和と安泰の世をもたらした。その間にまったく問題がなかったとはいえないが、偉業であったことは間違いない。おそらく信長や光秀が考えていたことは、家康の代で完成したと言えるだろう。しかしそうしてつくられた安泰の世で、光秀は主君殺しの汚名を着せられる。これは歴史の皮肉かもしれない。自分でつくったものに自分が刺

される、討たれる……、やはり歴史は繰り返されるのだ。

時代時代で様々な色眼鏡で見られ続けた歴史上の人物を、戦後、日本人はわりと正確な目で歴史を見直せるようになったことは、非常に良いことだと思っている。物事を平らかに見える世の中になったような気がする。ただし今も地球規模では戦国時代である。だからここで日本がどういうふうに動けば良いかということ、絶えず考えておかなければいけないのだろうなと感じつつ、大河ドラマを書き終えた次第である。

【講師略歴】

池端 俊策（いけはた・しゅんさく）

一九四六年広島県呉市生まれ。広島県立呉三津田高校を経て、一九七〇年、明治大学政治経済学部卒業。

高校時代から演劇部に入り、脚本作りに熱中していた。大学在学中からシナリオ作家協会主催の「シナリオ研究所」（現在の「シナリオ講座」）に通い、卒業後は竜の子プロダクションに半年勤務。その後は営業職など職を転々とし、今村昌平の脚本助手となり、今村監督の映画「復讐するは我にあり」（一九七九年、松竹／今村プロ）、『樺山節考』（一九八三年、東映／今村プロ）の第一稿を手がけた。

一九八四年、テレビドラマ脚本『私を深く埋めて』（TBS）、『羽田浦地図』（NHK）、『危険な年ごろ』（読売テレビ）の三作品で向田邦子賞、芸術選奨文部大臣新人賞を受賞し脚光を浴びる。

一九九一年、第二十九作目の大河ドラマ『太平記』

最後に私がここまでやってこれたのは、明治大学時代、アルバイトが忙しくて修得単位が足りずに一年留年した時、橋川文三先生に「君の卒論は国と個というものの関係を、一生を通してじつとみることだ。あなたが物書きになりたいのなら、それを頭に置いておきなさい」と言われたからで、この言葉を私は生涯忘れない。明治大学にいたから偶然いろいろな人と会って、そしてどこかで必然性もあったと感じる。すべてはつながっているなあ、人間というものは不思議な縁の中で生きているなあ、とつくづく思っている。

の脚本を手がける。

二〇〇九年春に『帽子』（NHK広島）で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞、同年秋には紫綬褒章を受章。二〇一七年、『夏目漱石の妻』（NHK）で「放送人グランプリ2017」のグランプリを受賞、同年、旭日小綬章を受章した。

二〇二〇年、自身二作目となる大河ドラマ『麒麟がくる』の脚本を手がける。

映画「復讐するは我にあり」「樺山節考」以来の仲である緒形拳の出演作を、『羽田浦地図』『百年の男』『帽子』（以上、NHK）など多数執筆。初監督映画『あつもの』でも緒形が主演している。二〇〇九年二月に、二〇〇八年に死去した緒形を追悼するドキュメンタリー番組『俳優 脚本家・池端俊策が見つめた緒形拳』（NHK）が放送された。

ビートたけしの主演作も、『昭和四十六年 大久保

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。（敬称略・到着順）



はっとり 哲也
昭和六十年・商学部卒業
サミット株
代表取締役社長
神奈川県川崎市在住

清の犯罪』『イエスの方舟』『あの戦争は何だったのか 日米開戦と東条英機』（以上、TBS）などを発表している。

また、一九九〇年の『忠臣蔵』では、両主演という形で、緒形拳（大野九郎兵衛役）、ビートたけし（大石内蔵助役）が共演した。

演出家の鶴橋康夫とのコンビは長く、『仮の宿なるを』『魔性』『危険な年ごろ』『風の棲む家』（以上、読売テレビ）などの作品がある。TBSプロデューサーの八木康夫との仕事も、『昭和四十六年 大久保清の犯罪』『協奏曲』『烏鯉』など多数。

日本放送作家協会会員。日本脚本家連盟会員。日本脚本アカイブズ推進コンソーシアム代表理事。向田邦子賞選考委員。また、日本映画学校に於いて多数の後進の育成に努める。



高澤 尚志
平成五年・商学部卒
縄文アソシエイツ(株)
パートナー
神奈川県横浜市在住



乾 和行
平成十九年・経営学部卒
大豊産業(株)・代表取締役
香川県高松市在住



井上 浩一郎
平成四年・農学部卒
(株)イノベーション・トラスト
代表取締役社長
東京都港区在住



若園 清
昭和五十二年・経営学部卒
(株)ダイイチ
代表取締役社長
北海道帯広市在住



高見 昌伸
昭和四十九年・商学部卒
伊勢湾海運(株)
代表取締役社長
愛知県知多市在住



大桑 弘嗣
平成五年・経営学部卒
(株)オークワ
代表取締役社長
和歌山県和歌山市在住



柴尾 雅春
昭和六十年・工学部卒
(株)ニフコ
代表取締役社長
東京都大田区在住



明大ニュース
創立一四〇周年記念事業募金に
校友会から五〇〇〇万円
明治大学創立一四〇周年記念事業募金に、
明治大学校友会から五〇〇〇万円が寄付され
ることとなり、五月十八日に駿河台キャンパ
ス・大学会館で北野大校友会長から柳谷孝理
事長への目録贈呈が行われた。柳谷理事長に
加えて、大原幸男経営企画担当常勤理事らが
出席した。

北野会長は、「母校の支援と会員相互の親睦を図ることが校友会の目的。皆さまの思いを学生の教育に役立てていただきたい」と述べ、「和泉キャンパス新教育棟の完成を校友会一同楽しみにしています」と目録を柳谷理事長に手渡した。

これを受け柳谷理事長は、「二〇二〇年度には学生・教育活動緊急支援資金にも多大なるご寄付をいただき、本法人としてこれほどありがたい心強いことはない」とした上で、「ご寄付は、創立一四〇周年記念事業に有効に活用させていただきます。北野会長をはじめ、校友会の皆さまに心から御礼申し上げます」と感謝の言葉を述べ、散会となった。

明治大学は二〇二一年一月に創立一四〇周年を迎え、十一月一日に記念式典の挙行を予定している。また引き続き二〇二二年三月末まで、創立一四〇周年記念事業募金への支援を受け付けている。

●二〇二一年度・二〇二〇年度入学式 新入生、新入生が新たなスタート

明治大学の二〇二一年度入学式が四月七日、日本武道館において、昨年実施されなかった二〇二〇年度入学式と合同で挙行された。爽やかな晴天の下、二〇二一年度の新入生八千七百七十六人(学部生七千七百二十九人、大学院生千四十七人)と、二〇二〇年度の入学

者八千三百四人(学部生七千三百三十一人、大学院生九百七十三人)が新たなスタートを切った。

式典は学部・大学院別に三部制で行われ、いずれも大六野耕作学長の告辞、柳谷孝理事長の祝辞、新入生代表による宣誓と続いた。告辞で大六野学長は、「知恵を絞り、大学教育の本質である協働体験を通じた学びを取り戻し、皆さんにも一緒にその一歩を踏み出していただきたい」と力強く語りかけた。

続く祝辞で柳谷理事長は、「勉学はもちろん、スポーツや芸術など、さまざまな価値観や文化的背景を持つ人たちと切磋琢磨し、それぞれの『個』の確立を目指していただきたい」と新入生、新二年生に向けてエールを送った。

新入生代表による宣誓は、各部とも二〇二一年度、二〇二〇年度の入学代表がそれぞれ一人ずつ登壇した。第一部では、関根奏さん(情報コミュニケーション学部1年)、福田のぞみさん(商学部2年)が、「学問に真摯に向き合い、揺るがない『個』を確立したい」「関根さん」、「新しい道を切り開いていけるような存在になれるよう勉学に励みたい」(福田さん)と誓った。

第二部は、増田浩太郎さん(総合数理学部1年)、市野遙香さん(農学部2年)が、「予想だにしない変化が起こっても、ひるむこと

なく乗り越えていきたい」(増田さん)、「これから専門性の高い研究や実習に取り組めることが楽しみ。新入生の皆さんは私たち二年生と共に頑張りましょう」(市野さん)と述べた。

第三部は、谷口楓さん(文学部1年)、梶原美空さん(経営学部2年)が「自己の可能性を広げ、新たな自分を発見していきたい」(谷口さん)、「出会いを大切にし、世界へ羽ばたける人材になれるよう日々精進したい」(梶原さん)と宣誓した。

三月に挙行された卒業式と同様に、入場は一・二年生のみとし、入場時の検温、消毒の実施や座席間隔を広く取るなどの感染対策が行われた。さらに、大学公式YouTubeチャンネルから式典のライブ配信も行われた。

●大六野学長

仏・教育功労章オフィシエを受勲

大六野耕作学長がフランス共和国から教育功労章オフィシエに叙された。叙勲式は、五月二十一日に駐日フランス大使公邸において執り行われ、大学から青野寛教務担当常勤理事、岡安孝弘学務担当常勤理事をはじめ大学役職者が参列した。

式典では、フランス大使館のステファンヌ・マルタン文化参事官から、叙勲理由について、リヨン政治学院をはじめとするフラン

スの大学との連携・学生交流や、フランスと日本の文化交流への貢献などであることが述べられ、「再びフランスへの留学が可能になった際には、多くの明治大学の学生に渡仏いただきたい」という言葉と共に、勲章が贈られた。

大六野学長は、受章スピーチで、創立者の三人がフランス法を学び、明治法律学校を開校したことなど、明治大学とフランスとの関わりについて触れた上で、「今回の受章は私個人というより明治大学の国際化への努力の結果」と関係者への謝辞とともに喜びを語った。

同勲章は一八〇八年、ナポレオンによって創設され、高等教育を含む教育全般において日仏文化交流に寄与した人を対象にフランス政府から贈られている。

●OB社長

▽高島屋スペースクリエイツ(株) 山下恭史氏
(一九八六年経営学部卒・五十七歳)

▽レオン自動機(株) 小林幹央氏 (一九七七年法学部卒・六十六歳)

▽中小企業ホールディングス(株) 岡本武之氏
(一九九三年法学部卒・五十二歳)

▽ダイニツク(株) 山田英伸氏 (一九八八年商学部卒・五十五歳)

▽(株)ユアテック 太田良治氏 (一九七八年工

学部卒・六十五歳)

▽(株)沖繩海邦銀行〓新庄一史氏(一九八八年法学部卒・五十七歳)

▽三洋工業(株)〓山岸茂氏(一九九九年商学部卒・四十五歳、六月二十五日就任予定)

▽トオカツフーズ(株)〓池田晋一氏(一九八九年商学部卒・五十五歳、六月三十日就任予定)

●OB首長

▽青森県つがる市長(二月二十一日告示・無投票)

倉光弘昭氏(無所属①、一九七九年農学部卒・六十四歳)

▽和歌山県海南市長(四月四日告示・無投票)

神出政巳氏(無所属⑤、一九七五年大学院工学研究科修了・七十歳)

▽島根県出雲市長(四月十一日投票開票)

飯塚俊之氏(無所属①、一九九〇年経営学部卒・五十五歳)

▽熊本県長洲町長(四月二十日告示・無投票)

中逸博光氏(無所属④、一九七八年商学部卒・六十六歳)

●現代マンガ図書館が駿河台に移転

「米沢嘉博記念図書館」とサービス一体化蔵書の複合利用が開始

明治大学「現代マンガ図書館」が東京都新

宿区から駿河台キャンパスへの移転を完了し、三月十九日より一般公開が再開された。同じく明治大学のマンガ図書館である「米沢嘉博記念図書館」とカウンターサービスや閲覧室を一体化させ、今後は両館の蔵書の複合的な利用ができることとなった。

同日には再開を記念したセレモニーが举行され、マンガ図書館長の南保勝美法学部教授をはじめ、マンガ図書館運営委員会の委員と、両館のスタッフなどの関係者、さらに来賓として米沢英子氏(故・米沢嘉博氏夫人)と西智子氏(元現代マンガ図書館スタッフ)が出席した。

式典では、南保館長が「今後もマンガ研究の拠点として一層の機能強化を図るべく尽力したい」と、移転作業に当たった関係者らへの謝辞とともにあいさつした。来賓の米沢氏は、「両館の本たちが今後の日本のマンガ研究に重要な役目を果たせること、そして、利用する皆さんに楽しんでいただけることをうれしく思う」と祝辞を述べた。続いて、南保館長、米沢氏、西氏の三氏によるテープカットと内覧会が行われ、セレモニーは終了。

現代マンガ図書館の蔵書は未整理のものを含め約二十七万冊、米沢嘉博記念図書館は約十四万冊で、両館で重複するものはあるものの、マンガ関係資料としては日本最大級の蔵書数を誇る施設となる。

現在は企画展「はじめてのバンド・デシネ展」を開催、フランス語圏のマンガで日本語に翻訳された作品を中心に、未邦訳のものも織り交ぜながら、その魅力を紹介する。

■場所 明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館一階

千代田区神田猿樂町一七七一

☎〇三―三二九六―四五五四

■日時 六月十一日～九月二十日

■開館日 月・金 十四時～二十時

土・日・祝 十二時～十八時

※詳細は米沢嘉博記念図書館ホームページを。

https://www.meiji.ac.jp/manga/yonezawa_lib/

●大分県と連携協力に関する協定を締結

明治大学と大分県は連携協力に関する協定を締結し、三月二十四日にはZoomによるオンラインでの協定締結式が実施された。明治大学から大六野耕作学長、源由理子副学長(社会連携担当、専門職大学院ガバナンス研究科教授)、大分県庁から広瀬勝貞知事ら県庁関係者が参加。さらに、校友会の矢野博久副会長と、大分県支部の役員らも出席した。

締結式の冒頭、大六野学長があいさつに立ち、大分県の歴史や文化、温泉や食など観光の魅力にふれ、「大分県の地域資源と明治大学の総合大学としての強みを生かした連携を

推進していきたい」と述べた。

協定書を交わしたのち、大分県出身で、本
学校友会の名誉会長でもある第八十一代内閣
総理大臣の村山富市氏（一九四六年専門部政
治経済科卒）によるビデオメッセージが上映
され、さらなる交流への期待と喜びのコメン
トが寄せられた。

大分県が県外の大学と包括的な連携協定を
締結するのは今回が初の試み。明治大学と大
分県はこれまで、二〇一三年の全国校友大会
や、ラグビー明早戦をはじめとする同県での
行事開催のほか、「別府の魅力と観光促進」
をテーマとしたリバティアカデミー講座の開
講など、さまざまな交流を行ってきた。今後
はこの交流をさらに活発化し、幅広い分野で
の連携に取り組んでいく。

●図書館

『三条西家本 除目書』を刊行

図書館の所蔵資料を利用した研究成果が、
『明治大学図書館所蔵 三条西家本 除目書』
（明治大学除目書刊行委員会編、八木書店出
版）として五月三十一日に刊行された。

本書は、平安時代・後三条天皇（一〇三四
～一〇七三）の自撰による、除目の儀式次
第・作法を書いた儀式書『除秘鈔』（『院御
書』の影印・翻刻を収録し、原本調査に基
づいた解説を付したものである。本史料の登

場により、謎に包まれていた後三条天皇の幻
の除目書の全貌が明らかになった。『除秘鈔』
と合わせて伝来した『無外題春除目』と、両
書の紙背に残存した文書の影印・翻刻・解説
も収録する。紙背文書は地方の名士から三条
西家に届いた書簡で、室町時代の都と地方の
交流の生々しい様子を伝える。原本の『除秘
鈔』と『無外題春除目』は本学中央図書館に
所蔵されている。

除目書研究調査グループの中心メンバーで
あり、図書館副館長でもある牧野淳司文学部
教授は、「長い問書庫に眠っていた史料が、
東京大学史料編纂所の研究者と明治大学図書
館および明治大学の教員・院生・関係者が力
を合わせることで、世に出ることとなった。
図書館所蔵の貴重な史料と最新の成果を多く
の人に見ていただけるとありがたい」とコメ
ントした。

●体育会ボードセーリング部

インカレで創部初の三連覇

体育会ボードセーリング部は、三月十四日
～十五日に和歌山セーリングセンターで開催
された二〇二〇年度全日本学生ボードセーリ
ング選手権大学対抗戦に出場し、見事優勝を
果たした。この優勝により創部初となる三連
覇を達成した。

全7レースが行われた今大会、各レースに

出場する3人の選手の合計ポイントで競われ
る団体戦で、明治大学は第1レースで一位に
なると、その後も各選手安定して上位を確保。
二位の関東学院大に93ポイント差をつけ優勝
した。主将の池田健星選手（法学部4年）は、
「悲願の三連覇を果たすことができ、今は
ほっとしている。コロナという壁を乗り越え、
部員全員が結束し、向上心を持ち続けたから
こそ優勝につながったと思う」と喜びを語っ
た。

●体育会拳法部

東日本大学リーグ戦七連覇を達成

体育会拳法部は、五月九日に横浜武道館で
行われた日本拳法第三十四回東日本大学リ
ーグ戦男子の部で優勝し、七連覇を達成した。
今大会は、新型コロナウイルス感染拡大を受
け、7人制リーグ戦形式を5人制トーナメン
ト形式に変更し、無観客試合とするなどの対
策が行われ、二年ぶりに開催された。

明治大学は順調に勝ち進み、決勝で中央大
学に見事勝利。主将の深町雅也選手（法学部
4年）は最優秀選手賞に輝いた。女子の部も
三位に入賞した。

優勝を受け深町主将は、「優勝することが
できて大変うれしく思います。この調子で今
年度の全ての大会で優勝できるように頑張り
ます」と喜びの言葉を述べた。



経済、法曹、文化など各界でご活躍の明治大学OB諸氏よ！ 来たれ！「連合駿台会へ！」

「連合駿台会」は、1953年に設立された「茗水クラブ」と、1964年に設立された「明友クラブ」が2002年に統合して設立された68年の歴史と伝統あるOB組織です。

新入生の皆様、入学おめでとうございます！

コロナ禍も新たな局面を迎えています
が、一向に収まる気配はありません。そんな中今年は入学式が執り行われた事はまことに喜ばしいことです。ましてや昨年の新入生も含めての入学式。二重にうれしいニュースでした。

連合駿台会は新入生を心から歓迎いたします。明治大学生としての誇りと喜びを胸

に生き生きとした学生生活を送っていただきたいと思います。そしてこれからの明治大学をさらに大きく前進させ、最高学府としての存在を確固たるものにしていただくべく、勉学に励まれることを望みます。今、この時にしかない有意義な学生生活を大いに楽しんでください！



連合駿台会会長
田村 駿
(明治大学評議員会議長)

各界で活躍されておられる明治大学校友のご入会を歓迎いたします

資料のご請求はこちらまで 連合駿台会事務局

TEL : 03-3296-4747 FAX : 03-3296-4748 HP : <http://www.rengosundaikai.jp>
Email : rengosundaikai@silk.ocn.ne.jp

★明治大学広報(5月1日号)に掲載された大学への支援広告。今後も2ヵ月に1回掲載していく予定です。

◆退会会員(令和二年四月～令和三年三月)

相木孝仁、青木孝、植木榮、宇敷和章、梅津章(故人)、江崎友次郎(故人)、金子光男、齋藤弘之、坂田政一、佐古則男、佐藤寛、高瀬伸英、竹端隆司、田中孝明、内木祐介、長崎清正、中正雄一、中村修、原田榮、平川清、藤川幸廣、松井洋二郎、宮澤光晴、村上知義、湯川孝則、義江邦夫

◆四月例会出席者

浅井宏、安達明正、安藤立美、石橋良一、伊東正博、伊原敏雄、潮田伊佐夫、榎本知佐、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、奥村勝広、鬼塚和也、加賀美猛、栢森靖、河村博、神林光、木下唯志、國井泰成、栗原権右衛門、黒崎昭男、小井戸亮文、小島清治、兒玉圭司、五味道雄、小山修、齋藤柳光、坂田英夫、坂本道昭、佐藤和正、佐藤健、佐藤仁、佐野公哉、澤野太嘉嗣、柴田清之、杉浦伸二、鈴木隆志、関根均、相臺志浩、高澤徹、高澤尚志、田村駿、辻井知明、当山明彦、徳丸平太郎、富水流孝二、二井康夫、西澤豊、長谷川進一、畠中君代、幡谷公朗、塙英幸、馬場範夫、林威樹、平田桂子、深代尚夫、福田和彦、藤代耕一、古本英樹、眞壁八郎、水澤元博、村岡健、村山友彦、室井恵明、柳谷孝、山口大介、山口政廣、山田晃久、山田朝彦、山端康幸、弓野理恵、吉田光一郎

